連載 - Nikkan Relay Column

NIKKAN 熱血サイト

アジアの戦後は終わっていない

大谷昭宏 ジャーナリスト

短い髪、口ひげをはやした大柄な男性が壇上に迎えられた。濃紺のポロシャツ、作業着のような綿パン姿。左胸につけた赤い花のリボンがなかったら、この日の主役、神戸市在住のフォトカメラマン、宇田有三さん（39）とは誰も気づかなかったはずだ。

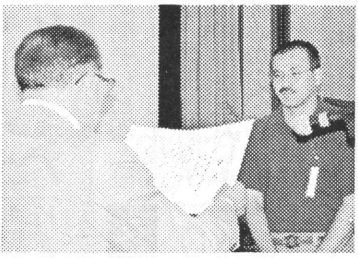
57回目の終戦記念日のおとといい。東京・日比谷の日本プレスセンターで日本ジャーナリスト会議（JCJ）のJCJ賞贈賞式が行われた。先日、このコラムでも書いたように、今年からこの賞に「黒田清JCJ新人賞」が創設され、第1回の受賞者となった宇田さんが、会場につめかけたメディア関係者や市民、230人の大きな拍手を浴びた。

宇田さんの受賞理由は、「中米、東南アジアのゴミ捨て場を生活の拠点にせざるを得ない人々を、長期間写真と文章で記録し、〝グローバル経済〟の陰を伝えた」、その功績。贈賞式のため、大阪から駆けつけてくれた亡き黒田さんの2人のお兄さん、誠三郎、脩さんが賞状と、正賞であるサクラ材で作ったオブジェを手渡して下さった。

黒田賞が訴えるもの

受賞の言葉のなかで、宇田さんは、「黒田清さんとは、とうとう一度もお会いできなかったのですが、改めて著作を読み返し、この賞に名前負けしてはいけないと戸惑っています。それにしても副賞の50万円はありがたい」と、関西人らしく見事に建前と本音を語ってくれた。

宇田さんがカメラを手にしたのは10年前。「写真は言葉の違いを超える」というのが、その理由だった。内戦が続いていたエルサルバドルやニカラグアなどの中米の国々に入り、ゴミに生活の糧を見出す人々の姿を、レンズを通して見つめていく。



「黒田賞」を受賞した宇田さん（右）に、黒田さんの兄・誠三郎さんから賞状が贈られた

「最初はゴミ捨て場のなかで生きている子どもたちの目がキラキラしていて、逆に生きる力をもらったこともありました。でも、この人たちの目が輝いている、たくましいと、伝えるだけではダメだ、貧困の背景には何があるのか、貧困がどうして作り出されるのかを訴えていかねばならないと思うようになったのです」

宇田さんはいま、4つの戦争にかかわっている。エクアドル、ニカラグア、韓国の元慰安婦、そして半世紀以上も続いているビルマの内戦。

「日本のメディアは全く無視しています。でも、ビルマに軍隊を作ったのは、かつての日本軍で、今でもビルマでは日本の軍歌が自分たちの軍隊の歌として歌われているのです」と訴え、「日本が起こした戦争、そしてアジアの戦後は終わっていないんです」と強調した。

この日、東京は57年前もそうであったという灼熱の猛暑。でも夜の帳が降りる頃、三日月が日比谷の空に浮かんだ。宇田さんの夕陽が照らされたゴミ捨て場の写真を思い起こす。「ええ人に賞を出してくれたんやなあ」。夜空で黒田さんが微笑んでいるような気がした。

火曜は有働由美子 NHKアナウンサー